

「男、突っ走る！」

第
112
回

第一稿

作・壽倉 雅

1 名古屋美術大学・駐車場

雅也が車から降りてくる。

N 「約一ヶ月近くの軟禁生活を終え、二月に入ると仕事復帰をした僕は、延期になっていた自主映画の音声収録のため、名古屋美術大学を訪れました」

2 同・映像編集室

雅也が入ってくる。

雅也 「おはようございます」

横田、日向、美紀が既に来ており、迎える。

横田 「おはようございます。お忙しいところ
すいません」

雅也 「いえいえ。まずは皆さん、いろいろお
騒がせして申し訳ありませんでした」

日向 「びっくりしましたよ、まさか木内さん
がコロナに感染したなんて」

雅也 「自分でもびっくりですよ。けど、いく
ら感染対策をしても、家の中だとマスク外

しちゃうでしょ。そういうところで、家族内感染の可能性もありますから、皆さんも気を付けてくださいね。経験談だったら、いくらでも喋りますから」

美紀「後遺症とかは、もう大丈夫なんですか？」

雅也「おかげさまで。最初味覚が全くしなかったときは、どうなるかと思いましたが、四日で味覚は取り戻したので良かったです。中には、コロナになって半年以上経っても味覚障害とか後遺症に悩まされる人もいます。って言いますから、そういう面では僕は本当に軽症で良かったって思いますよ。でも精神的に辛いものはありますよ。外も出られないし、お腹は空くから味のしない食事をずっと取らなきゃいけないんですから」

美紀「私も気を付けないと」

横田「撮影に影響が出なかったのが、本当に良かったです」

雅也「本当は先月に音源収録だったのに、申

し訳ありません。映画祭まで、ギリギリになっちゃいませんか？」

横田「まあ、何とかなりますよ。編集はもう九割終わりました。後は、今日収録する音を調整すれば、ほぼ完成です」

日向「映画祭の申し込みも、もうすぐで満席になりそうなんですよ」

雅也「そりゃ横田監督の学生生活最後の作品が見れるんですから。それに、これまで手掛けた短編映画をいくつも上映するって言うんですから、席が埋まるのも当然ですよ」

と、奥の部屋から大きな声が聞こえてくる。

男の声「ハハハッ。よくぞ見破ったな！」

雅也、怪訝そうに振り向く。

横田「ああ、今、後輩たちが映画の撮影してるんですよ」

雅也「そうでしたか。それにしても、どっかで聞き覚えのある声だな……」

と、奥の部屋から橋岡が出てくる。

雅也「はっしーさん……！」

橋岡「あれ、うちーじゃないか」

雅也「ご無沙汰してます」

橋岡「聞いたよ。横田監督の最新作の主演、うちーがやったそうじゃないか」

雅也「そうなんです。初の映像作品で、初主演。いろいろ大変でしたけど、何とか」

橋岡「（横田に）うちーはね、スリジエネの初舞台と一緒に共演したんですよ。（と雅也に）もう二年くらい経つかね」

雅也「はい。あの頃は、舞台の上手とか下手も知らない、演技のえの字も知らない人間でした」

橋岡「それがスリジエネで、何回も舞台踏んで、脚本と演出もやって、音響オペもやっただよね」

雅也「本当、スリジエネに関わってから、思いがけない形でいろんなこと挑戦させてもらいました」

橋岡「四月に発表会あるんでしょ。国枝さん

から聞いたよ」

雅也「絶賛稽古中です」

横田「じゃあ、そろそろ収録始めますか。

(と美紀に) 最初に木内さんお願いします」

雅也「はい」

と、音声収録室に入り、イヤホンをつ

ける——横田と日向が、準備を行う。

横田「では、シーン二十一のセリフ行きます。

リップシンクを意識してお願いします」

×

×

×

音声収録室。

雅也「はい、分かりました」

横田の声「では行きます。よーいスタート」

雅也「そっか。俺が幸せにしてやんなきゃな、

ミュを」

美紀(映像)「え? なんで?」

雅也「だって、じゃなきゃ、誰がしてくれる

のかなって、ふと思った」

横田の声「はい、オッケーです」

N「いくつかのシーンの音源収録を終え、後

は上映会を待つのみとなりました」

3 住吉ダンススタジオ

雅也が入ってくる。

N 「その週末、僕は約一ヶ月ぶりにアカデミーレッスンにも復帰しました」

雅也、無人体温測定器で体温を測り、
備え付けの消毒液で手を消毒する。

雅也 「おはようございます」

既に来ている美穂子、千世、まひるが
迎える。

まひる 「うっちー、大丈夫でしたか？」

雅也 「(一同に) ご心配おかけしました」

美穂子 「特に大きな後遺症もなくて良かった
ですね」

雅也 「本当ですよ。味覚障害と嗅覚障害が起
きたときは、どうなるかと思いましたが」

千世 「お母さんから聞いたけど、私たちがち
やんとマスクとか換気をしてたから、クラ
スターにもならなかったんでしょ。危なか

ったよね」

雅也「そうなんだよ。だから、感染防止対策
って大事なんだなって思うわ。千世も、学
校で気を付けないとね」

千世「うん」

と、亜里沙、香奈枝、隆太が入って
くる。

亜里沙・香奈枝・隆太「おはようございます」

雅也・まひる・美穂子・千世「おはよう」

隆太「うっちーだッ（と雅也に抱き着く）」

亜里沙「うっちー」

香奈枝「うっちー」

雅也「みんな、元気だった？」

隆太「うん」

亜里沙「元気そうで安心した」

雅也「もうこの通り元気だよ」

香奈枝「良かった」

美穂子「みんな心配してたもんね」

雅也「遅れた分を、取り戻さなきゃね」

×

×

×

雅也、まひる、美穂子、千世、亜里沙、
香奈枝、隆太、翔、琴音、秀樹、美香、
沙耶が集まっており、谷岡が演出をし
ている。

谷岡「亜里沙と香奈枝と翔は、ここはどこな
んだろうって不思議そうにしててね。幕が
上がった時、三人は板付きだから」

亜里沙・香奈枝・翔「はい」

谷岡「で、美香と沙耶は苛立つように、周り
をウロウロしててね」

美香・沙耶「はい」

谷岡「この時、BGMが流れます。音きつか
けで、うっちーとまひるとヒデが出てくる。
うっちーたちも、不思議そうに辺りを見回
しながらゆっくり入ってきてね。BGMの
タイミングは、リハーサルの時に確認する
けど、BGMがフェードアウトし始めたら、
舞台上の椅子に座って」

雅也・まひる・秀樹「はい」

谷岡「全員がワイワイ話したところで、壮大

なBGMを流すので、その音をきっかけに、先頭にして千世と美穂子が後ろに従えたりゆーたが入ってください」

隆太・千世・美穂子「はい」

谷岡「この三人の説明台詞の後に、りゅーたが手をかざすところがあるでしょ。その時に、可愛いポップなBGMが流れます。そのきっかけで、琴音が可愛くて出てきてください」

琴音「はい」

谷岡「きっかけはこんな感じですよ。じゃあ、一度始めからやっていきましょう。私が止めるまでは、演技を続けてください」

一同「はい」

谷岡「じゃあ、幕が上がるところから行きますよ。よーい、スタート」

それぞれ演技を始める一同。

N「四回も稽古を休んでしまっただけに、遅れた分を取り戻さなければならず、自宅療養中に台本を見ていたのでセリフは頭に入

っていましたが、それでも実際現場で芝居をするとなると、既に他のメンバーたちは演出がつけられていたので、少しでもみんなの足を引っ張らないようにと必死でした。また、稽古を一緒にしていくと、アカデミーが始まって約一年の子どもたちの成長を感じ取ることができました。これから数を重ねていけば、みんなにとって良い経験値になるだろうと思いました」

4 シネマスコーレ・表（夜）

N 「二月中旬、名古屋の『シネマスコーレ』で、横田監督の映画祭が行われました。この日は、初舞台以来、母も見に来ることにまりました」

横田や日向、関係者や客たちが談笑している――雅也と真保がやってくる。

真保 「結構来てるわね」

雅也 「関係者の人も多いみたいだけどね」

横田 「（雅也に気が付いて）木内さん」

雅也「どうも監督。今日のご盛会、おめでとうございます」

横田「ありがとうございます。登壇挨拶、よろしく願いますね」

雅也「もちろんです」

と、田所と忍がやってきて、

忍「うっちー、久しぶりッ」

田所「うっちー、こんばんは」

雅也「シノブじゃん！ それに、田所さんまで」

田所「私たちね、前に横田監督の作品に出演したの。その作品も上映されるって言うから、見に来たの」

雅也「そうでしたか」

忍「びっくりしたよ。うっちーが横田監督の映画の主役だなんて。ずっと頑張ってきた甲斐があったね」

雅也「（苦笑して）まあね。シノブは、相変わらずエキストラやってるの？」

忍「うん。田所さんにも、たまに声かけてい

ただいてね。楽しくやってる」

雅也「そっか。(と真保を見ながら) あ、紹介します。うちの母です」

真保「息子がお世話になっております」

雅也「(田所と忍を見ながら) 田所さんは、スリジェネ結成当初に一緒に運営をやっていた、シノブは同じ一期生のメンバーだったの」

田所「息子さんの主演作、楽しみですね」

真保「ええ、まあ」

と、洗がやってくる。

雅也「洗先生ッ」

洗「ああ、うちー。お疲れっす」

雅也「登壇挨拶考えた？」

洗「何となくね」

雅也「まあ、何とかなるよ」

洗「今日、翔と琴音も来るんだっけ」

雅也「うん。美紀さんも新川さんも、キャス

トは勢ぞろい」

と、スタッフが出てくると、

スタッフ「大変長らくお待たせしました。開場になりましたので、順番に中へお入りください」

と、ぞろぞろ中へ入っていく一同。

5 同・上映室

座席に座っている雅也、真保、横田、日向、田所、忍、洸、美紀、友里恵、翔、琴音、その他観客たち——ブザーが鳴り、会場が暗くなり、スクリーンに映画が上映される。

N「いくつかの横田監督の作品が上映され、僕が主役の映画『tenderloin』は、最後に上映されました」

以下、映画本編をカットバック。

6 河川敷（映画本編）

高校の制服を着た雅也（レイ）が寝転がり、空に向かって手を伸ばしている——とても眩しそうな顔。

と、友人の洗（ヒロ）がやってくる。

洗「よう、レイ（と隣で寝転ぶ）」

雅也「よう、ヒロじゃん」

洗「なあ、こうやってさー、寝転ぶじゃんか。でさ、こうやって。気づいたらちやんと、

良い位置に枕があんの不思議だよなあ」

雅也「無意識にそこにあるって、安心してさ。

思いつきり、勢いつけたりしてな」

洗「でも時々、枕がなくてさ。思いつきり頭打つんだよな」

7 学校・教室（同）

机の上に美紀（ミュ）が座り、椅子に、レイが座っている。

美紀「ねえ、たとえば私がいなくなっても大丈夫？」

雅也「分かんない」

美紀「そっか」

と、机から飛び降り、ドアに向かう。

雅也「なあ」

美紀、振り返る。

雅也「気をつけて帰れよ」

美紀「優しいんだね」

8 神社（同）

神社でお参りをする雅也と美紀。

雅也、ちらりと目を開けて、拝む美紀を見る。

とても真剣にお願い事をしている美紀。

雅也「なにお願い事したの？」

美紀「えー？ お母さんの疲れが吹き飛んで、

家の前の猫が喧嘩をやめること」

雅也「何それ」

美紀「だって、声枯れるくらい喧嘩してんだもん。そんでー、世界が平和になるようにって」

ニコニコ笑って、世界の全てを愛する

ような表情をする雅也。

雅也「そっか。俺が幸せにしてやんなきゃな、ミユを」

美紀「え？　なんで？」

雅也「だって、じゃなきや、誰がしてくれるのかなって、ふと思った」

美紀「優しいね、レイは。え、じゃあ、よろしくお願いします」

9 学校・ベランダ（同）

雅也と洗が話している。

洗「なあ、あの女のどこがいいの」

雅也「彼女は本当にすごいよ」

洗「あー？」

雅也「でも、彼女がすごいってことをわかるためには、彼女よりも凄くならなきやならないんだ」

洗「いつも通り意味わかんないな」

10 ラブホテル（同）

雅也と、売春婦風の女の友里恵（ユリ）が、ベッドの上で、隣同士で座っている。

友里恵 「何でみんな、したいと思うのに、しないんだろうね」

雅也 「さーね。」

友里恵 「だって、人間じゃん？ したいと思うじゃん」

雅也 「しかも、誰かを傷つけてる訳じゃないのよね。みんな、誰かを怖がってんだろうな。自分で決めたルールだと思い込んでさ。結局、他人が怖いんだよ。他人の目が怖いんだよ」

友里恵 「……だね」

と、雅也の唇を奪う——唇を重ねていく雅也と友里恵。

11 河川敷（同）

琴音（幼少期のミュ）が落ち込んで座っている——近くには、ランドセルと中身の散らかった教科書等。そこに、翔（幼少期のレイ）がやってくる。しばらく沈黙が続き、翔が琴音を抱き

しめる。

12 バスの中（同）

雅也が、愁いを帯びた顔で車窓からの景色を眺めている。

13 シネマスコーレ・上映室

上映が終わり拍手をする一同。

× × ×

出演者登壇で前に出ている雅也、横田、洗、美紀、友里恵、翔、琴音——一番端で司会をしている横田。美紀が挨拶を終えているところ。

美紀「本日はありがとうございました」
拍手をする観客たち。

横田「では最後に、主演の木内さんお願いします」
ます」

雅也「はい。（と美紀からマイクを受け取る
と）主役のレイ役を演じさせていただきま
した、木内雅也です。今回映像作品初挑戦

かつ初主演で、慣れない中、横田監督をはじめ皆さんに助けをいただきながら、無事にクランクアップを迎えることができました。これまで数多くの作品を手掛けてこられた横田監督の卒業制作である今作で、主演が僕でというお話を伺った時、『ああ、こりゃコケるな』というのが本音でした。それぐらい自分が横田監督の作品の主演をやるということが、重責に感じました。お見苦しい演技だったとは思いますが、こうして一つの作品として、皆さんにご覧いただけただけは大変嬉しく思います。横田監督、本当に貴重な機会をありがとうございました。そして、ご来場の皆様、本日はありがとうございました（と深々と一礼する）

拍手をする一同。

×

×

×

集合写真撮影のために並んでいる雅也、横田、洸、美紀、友里恵、翔、琴音――

—それぞれスマホで写真を撮影している真保、日向、田所、忍たち。

N 「五十分近い尺を見る中で、『あのシーン、ごっそりカットされてる』と思った瞬間が何度もありました。これが映像作品における宿命であり、それは脚本でも同じことが言えます。また、ほぼ自分が出ずっぱりなので大きなスクリーンに自分がデカデカと映し出されているのは見ていて恥ずかしいものがありましたし、作品の中とは言え母親に自分のキスシーンを見られるのはとても抵抗がありました。こうして、映画祭は無事に上映が終わり、直近ではついにスリジエネアカデミーの成果発表会を残すのみとなったのでした」

つづく